

〔課題演習報告〕

中高一貫教育校におけるキャリア教育の改善・充実に関する研究
ーキャリア教育プログラムの開発を通してー

増井 秀行

Hideyuki MASUI

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻学校運営リーダーコース

佐賀県立致遠館中学校・高等学校

(2017年1月6日受理)

本研究は、中高一貫教育校におけるキャリア教育の改善と充実を目指し、キャリア教育プログラムを開発することを目的とする。キャリア教育を推進するための校内組織の整備、生徒の意識調査や卒業生のアンケート調査の実施、その分析と推進する組織での議論を経て、全体構想、評価指標、年間計画を作成した。学習活動、ポート・フォリオ、カウンセリングを柱として、中学校段階のキャリア教育プログラムを試行した。その結果、生徒の基礎的・汎用的能力の向上、教師のキャリア教育に対する意識の向上において一定の効果が得られた。

キーワード：中高一貫教育、キャリア教育プログラム、基礎的・汎用的能力

1 主題設定の理由

在籍校は、佐賀県で最初に開校された併設型中高一貫教育校である。「世界の中の日本人として、未来社会の文化の創造と発展に力を尽くす、豊かな人間性と進取の気性に富む若人を育てる」を教育目標に掲げ、校訓は、cultivate (自己啓発)、create (創造)、challenge (チャレンジ) としている。主体的に社会の発展に貢献できる人材育成は本校の教育課題であり、そのための学力向上や進学実績が一つの成果として求められている。

在籍校では、ほぼ100%の生徒が4年生大学への進学を希望しているが、60%前後の合格率で推移している。また、高校進学時に普通科と理数科の学科選択を行う。普通科では高校1年次に文系と理系の文理選択を行うことになるが、理数科では高校3年間カリキュラムは変わらない。したがって、生徒個々の進路に向けて、高校進学時の普通科又は理数科の進路選択が適切に行われる必要がある。

図1は、H27年4月に実施された全国学力推移調査をもとに、進路希望の有無と学習意欲の関係を表したグラフである。中学2年生より、中学3年生で進路希望が未定の生徒は、学習面で悩んでいる生徒の割合が多い。つまり、中学3年生では

進路希望の有無が学習意欲に影響を与えるため、中2から中3にかけて適切な進路指導を行い、生徒の学習意欲を高めることが大切である。

次に、キャリア教育に関して、H27年度に在籍校で実施した教師に対するアンケートの結果を図2、図3に示した。図2で示されるように、約半数の教師がキャリア教育はできていないと感じている。さらに、図3で示されるように、40%近くの教師が育てる生徒像の共通認識ができていないと感じ

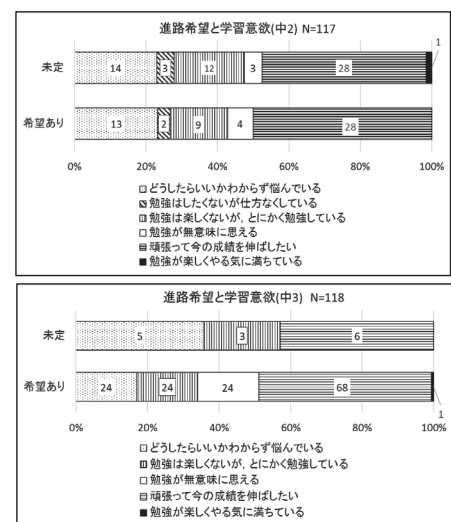


図1 進路希望と学習意欲

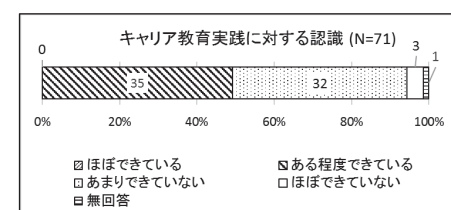


図2 キャリア教育の実践への認識

じている。職場体験をはじめ様々な体験活動が実施されているが、キャリア教育の全体計画はなく、系統的にキャリア教育が実施されているとは言い難い。

以上のような現状と課題を踏まえ、キャリア教育を改善・充実させることが、生徒の学習意欲の向上につながると考え、本主題を設定する。

2 研究主題・副題の意味

(1) 「中高一貫教育校におけるキャリア教育の改善・充実」とは

表1 文部科学省が提唱するキャリア教育

<p>【キャリア教育の定義】</p> <p>キャリア教育とは一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育である。</p> <p>【キャリア発達とは】</p> <p>社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程を「キャリア発達」という。</p> <p>(中央教育審議会答申 平成23年1月31日)</p>

表1は文部科学省が提唱するキャリア教育の定義である。さらに、キャリア教育で育成すべき基盤となる能力として、基礎的・汎用的能力をあげている。本研究では、これらの考えをもとにキャリア教育を進めていく。

中高一貫教育校におけるキャリア教育の改善・充実とは、キャリア発達を適切に促すキャリア教育プログラム（以下、「プログラム」と示す）を開発することを通して、中高6年間で意図的・計画的に基礎的・汎用的能力を身につけさせ、将来を見据えた適切な進路選択を行い、結果として生徒の学習意欲を高めることである。

(2) 「キャリア教育プログラムの開発とは」

キャリア教育プログラムの開発とは、効果的に基礎的・汎用的能力を高めるために、学習活動、ポート・フォリオ、カウンセリングを発達段階に応じて、適切に配置した教育計画を作成することである。

図4はプログラムのイメージ図である。6年間で2年ごとに捉え、生徒が基礎的・汎用的能力を獲得するため、⑦学習活動、④ポート・フォリオ、⑨カウンセリングを柱とした。

⑦学習活動とは、学習指導要領に示されている教育課程とキャリア教育に関わる学校独自の体験的な活動や進路講演会など学習活動全般とする。

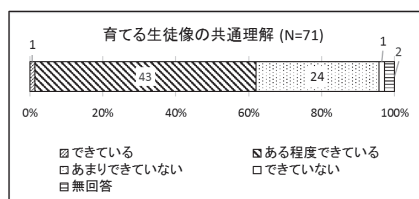


図3 育てる生徒像の共通理解

④ポート・フォリオは、一般的には生徒の活動に関わる成果物のことを指すが、本研究では学習活動におけるワークシートなどの成果物に加え、生徒の定期考査や模擬試験の学習成績、Q-U検査やキャリア意識調査、進路希望などのデータをまとめた個人資料も含めることとする。

⑨カウンセリングとは、定期的な面談と進路・学習面に不安を抱える生徒の相談への対応など、個別の支援とする。

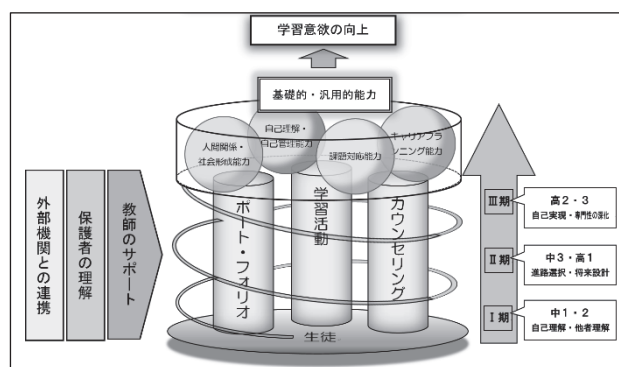


図4 6年間のキャリア教育プログラムのイメージ図

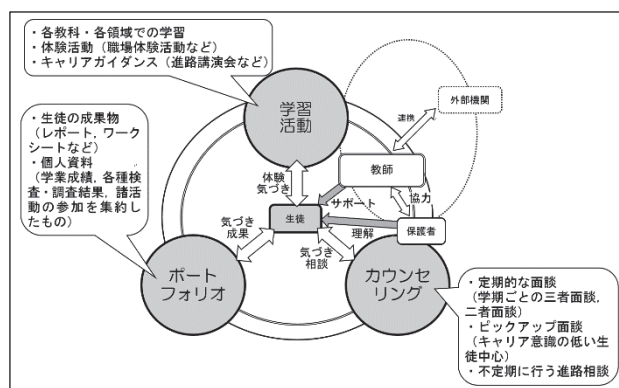


図5 3つの柱と生徒・教師・保護者・外部機関の関係

図5は、生徒、教師、保護者の関係性を示した概念図である。生徒は基礎的・汎用的能力を獲得する過程で、教師、保護者、外部機関の支援を受け、「学習活動」「ポート・フォリオ」「カウンセリング」を通して自己の内面や成長に気づいていく。ある意味、「学習活動」「ポート・フォリオ」「カウンセリング」は、教師、保護者、外部機関の三者をつなぐ機能も有する。

本研究では、2年間の限られた期間であるため、中学校段階でのプログラム開発を目指し、成果物としてキャリア教育ガイドライン(教師用手引き)の作成をゴールとして設定した。

3 研究の目的

中高一貫教育校におけるキャリア教育を改善・充実させるために、中学校段階でのキャリア教育

プログラムを開発する。

4 研究の仮説

キャリア教育プログラムを開発することで、キャリア教育が改善・充実され、教師のキャリア教育に対する意識が高まることを通じて、生徒の基礎的・汎用的能力が向上し、進路に対する適切な進路選択が行われ、結果として学習意欲の向上が見られるだろう。

5 仮説説明の具体的な方策

- (1) キャリア教育を推進する組織の整備
- (2) 在籍校の実態調査
 - ① 卒業生アンケート
 - ② キャリア教育における生徒の意識調査
 - ③ 基礎的・汎用的能力の獲得感と学習意欲の関係
- (3) 全体構想の作成
- (4) プログラムの試行と評価
 - ① 学習活動
 - ② ポート・フォリオ
 - ③ カウンセリング

6 研究の実際

- (1) キャリア教育を推進する組織の整備

キャリア教育を推進する組織として、中高一貫教育6年間の教育計画の検証や改善が主な活動内容である中高一貫教育研究委員会(以下、「委員会」と示す)を位置付け、下部組織として、作業部会(以下、「部会」と示す)を設置した。

表2 推進する組織のメンバー構成

【委員会メンバー】 副校長、教頭、事務長、主幹教諭、中高教務主任、中高進路主任、 中高生徒指導主任、中高各学年主任、SSH主任、キャリアCo(本研究者) (以上、18名) 【部会メンバー】 中教務主任、中高進路主任、中学各学年主任、キャリアCo(本研究者) (以上、7名)
--

委員会と部会は、プログラムの開発を目指す。本研究者(筆者)は、キャリア教育コーディネーター(以下、「キャリアCo」と示す)として在籍校に関わり、委員会、部会のマネジメントを行った。図6は、キャリア教育を推進する組織図である。委員会はプログラムを開発・共有する場として、部会はプログラムを試行・評価する場として位置付けた。部会でキャリアCoが、メンバーと連携して、会を運営し、プログラムの試行と評価を行う。その実施報告と情報提供を委員会で行い、情報を

共有し、プログラムの開発を行う。部会は計画段階では月1回の実施を予定していたが、十分な協議の時間を確保するために6月から週1回実施することとした。また、在籍校では中高合同の職員会議とは別に、中

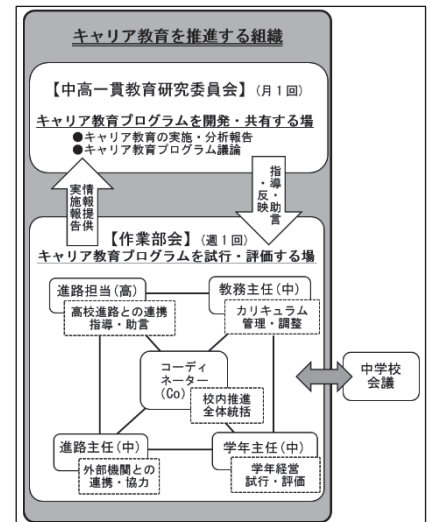


図6 キャリア教育を推進する組織図

学校職員による中学校会議を毎月実施している。表3は今年度実施した部会での協議内容である。年間計画に基づいた活動の実施・評価だけでなく、総合的な学習の時間や土曜授業の在り方なども協議の対象とした。総合的な学習の時間は、キャリア教育と各教科・領域との関連を図る上で、土曜授業は体験的な活動を充実させる上で、いずれもプログラムの学習活動に関わる。部会で協議した内容を中学校会議で提案することで、中学校職員全体で議論することができた。このように、キャリア教育の直接的な活動そのものの議題のみならず、学校全般に関わる議題を取り扱うことで、キャリア教育を軸とした教育活動の見直しが図られているといえる。

表3 今年度の部会の主な協議内容

回	月日	主な内容
第1回	4月20日	今年度の取組と今後の方向性 メンバーの役割分担
第2回	5月11日	高校授業参観、高校生と語る会について キャリア教育の視点に立った道德、学活、教科指導について
第3回	6月8日	総合的な学習の時間の在り方 キャリアカウンセリングの在り方 キャリア教育ガイドラインについて
第4回	6月15日	総合的な学習の時間の在り方 キャリア教育ガイドラインについて
第5回	6月29日	キャリア・ガイダンスの検証 土曜日の授業実施について
第6回	7月6日	中3校内実力テストの検証 総合的な学習の時間の在り方
第7回	7月13日	総合的な学習の時間の在り方
第8回	9月14日	土曜日の授業実施について 総合的な学習の時間の在り方
第9回	10月5日	来年度の年間計画について 語彙・読解力トレーニングの導入について
第10回	10月19日	キャリア目標とキャリア意識調査の見直し
第11回	10月26日	キャリア目標とキャリア意識調査の見直し 来年度の年間計画について
第12回	11月2日	キャリア目標とキャリア意識調査の見直し 来年度の年間計画について
第13回	11月9日	語彙・読解力トレーニングについて
第14回	11月16日	キャリア目標とキャリア意識調査の見直し 来年度の年間計画について
第15回	11月23日	キャリア教育ガイドラインについて
第16回	11月30日	キャリア教育ガイドラインについて
第17回	12月7日	キャリア教育ガイドラインについて
第18回	12月14日	キャリア教育ガイドラインについて
第19回	12月21日	キャリア教育ガイドラインについて

会議の進行内容

- ① 実施内容、調査報告
- ② プログラム開発へ向けた協議

(2) 在籍校の実態調査

①卒業生アンケート

実施日	平成28年8月10日～9月30日
対象者	致遠館高校19～22回生 (平成28年4月時点で22歳～25歳)
調査の目的	致遠館中学校の1期生から4期生に該当する学年の卒業生の追跡調査を行い、卒業生が社会や大学で必要だと感じる資質・能力を明らかにし、キャリア教育プログラムの開発に活かす。
調査内容	・卒業後のキャリアルート ・社会で求められる資質・能力 ・現在の生活の満足感
回収率	23%(213/914)

ア) 分析

回答のあった卒業生213名のうち、79%が現在就職をしている。19%は大学院または大学に通っている。図8は高校在学中の学科の違いによる現在の職種である。文系の卒業生は、営業・事務と教員を含む公務員が多かった。理系の卒業生は、技術職や医療に携わる職が多かった。

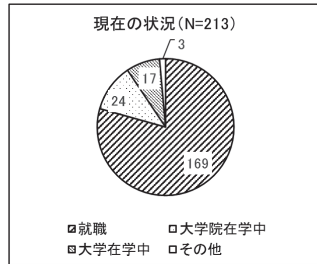


図7 卒業生の現在の状況

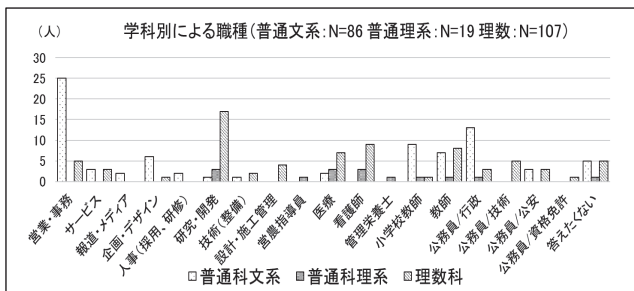


図8 高校在学中の学科別の職種

図9は最終学歴と今の仕事に対する満足感の関係を表したグラフである。最終学歴が上がるほど、仕事に対する満足感が高まっている。

次に図10を見ると、社会的地位の満足感を得ている卒業生は、仕事の満足感も得ている。さらに、図11では生活の満足感を得ている卒業生は、社会的地位の満足感も得ている。

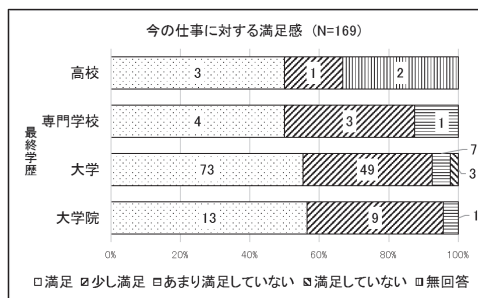


図9 最終学歴と仕事に対する満足感の関係

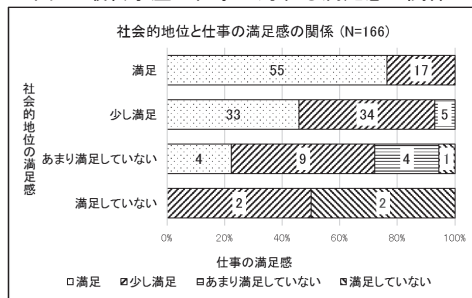


図10 社会的地位と仕事の満足感の関係

位の満足感を得ているといえる。これらの結果から、生活の満足感を得るためには、社会的地位や仕事

の満足感を得ることが必要で、ある程度の最終学歴が条件として考えられることを示唆している。

次に、図12、13のグラフより、中高段階で身についたと感じる能力として主体性を選択した卒業生は40名程度であったが、中学生に中高段階で身につけて欲しいと思う能力では120名以上が選択しており、大きな差が見られた。

イ) 考察

回収率が23%で、アンケートに回答している卒業生が限定されていることを考慮すると、今回の調査の信頼度は高いとは言えない。しかし、卒業生のキャリア・ルート

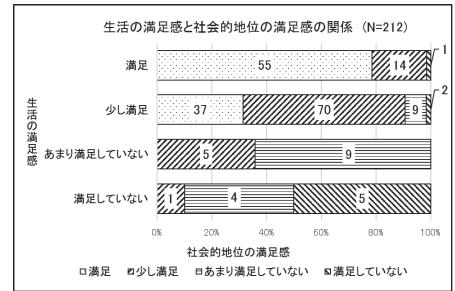


図11 生活と社会的地位の満足感の関係

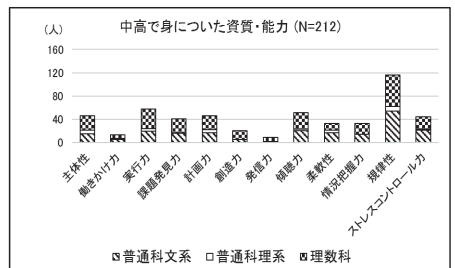


図12 中高で身についた資質・能力

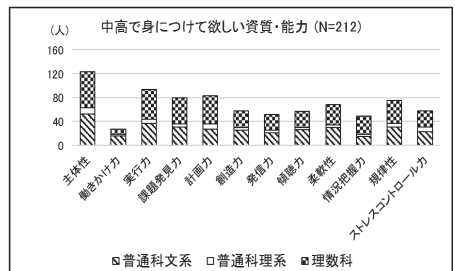


図13 中高で身につけて欲しい資質・能力

と、生活の満足感につなげていくためには、ある程度の学歴が条件として考えられることが示唆され、中学校段階での学科選択の重要さと生徒が希望する進路実現の大切さを教師間で共通理解する必要がある。

また、卒業生が中高生に身につけて欲しいと感じている資質・能力や表4の後輩へのアドバイスでは、主体性やコミュニケーション能力の必要性が強調され、自ら考えて行動できるような体験活動の充実や様々な人と対話する場面の設定など、学習活動の工夫が求められることが分かった。

表4 後輩に対するアドバイス

- ・部活で人間関係とコミュニケーション力を身につけておくこと。たくさんの友人や社会の人と関わる機会をもち、広い視野と考え方を学んでおくこと。致遠館での生活は、ほんの小さな社会の一部です。(看護師)
- ・自分の意見をしっかりと相手に伝え、人前でもしっかりと自分の考えを言うことや発表することに慣れておいた方がよい。何事も受け身の姿勢にならず、積極的に自らの意思で考えて実行していく力をつけておくべきだと思う。(公務員/国際交流課)

②キャリア教育における生徒の意識調査

実施日	平成27年7月1日～8日
対象者	中学2・3年、高校1年
調査の目的	在籍校における生徒の自己の基礎的・汎用的能力に対する認識を把握すること
調査内容	基礎的・汎用的な能力である「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」のそれぞれについて8項目の質問を準備し、4件法で回答する。

ア) 分析

最も低い項目は、「A6:周りの人たちに声かけや働きかけを行ったり、リーダーシップがとれる」であり、中2、中3、高1の順で、2.58、2.72、2.53である。各学年の発達段階や活動内容を考慮して気になる項目としては、中2では「B1:自分の良さや優れている面を述べるができる」が2.63で2番目に低かった。中3では「D4:自分は将来何のために働くか説明できる」が2.81でキャリアプランニング能力の中では最も低かった。

表5 生徒のキャリア意識調査結果

キャリア教育生徒意識調査集計 (中2:N=117 中3:N=117 高1:N=238)				
質問項目		中2	中3	高1
人間関係形成能力	A1 相手の話や意見をよく聞くことができる。	3.28	3.33	3.19
	A2 自分の考えや他の人にわかりやすく伝えるようにしている。	3.15	3.11	2.97
	A3 学級や部活動などで友達や先輩・後輩と仲良くできる。	3.50	3.54	3.38
	A4 係・生徒会活動を他の人と協力して活動することができる。	3.40	3.44	3.16
	A5 他の人の考え方や立場を考え、受け止めることができる。	3.29	3.39	3.26
	A6 周りの人たちに声かけや働きかけを行ったり、リーダーシップをとれる。	2.58	2.72	2.53
	A7 学級や部活動など集団のために役に立つことを実行している。	2.83	2.91	2.69
	A8 学校や社会のルールを理解し守ることができる。	3.34	3.49	3.32
自己管理能力	B1 自分の良さ(長所)や優れている面を述べるができる。	2.63	2.64	2.61
	B2 他の人と違う自分の個性や性格をあげることができる。	2.91	2.92	2.83
	B3 「やればできる」と考えて行動している。	2.85	3.14	3.03
	B4 目標を持ち、それに向かって努力することができる。	3.08	3.17	2.91
	B5 物事に進んで取り組んでいる。	2.91	3.09	2.89
	B6 困難な状況や思うようにいかないときでも我慢して実行していこうとする。	3.04	3.19	3.04
	B7 ストレスを発散したり対処する方法を持っている。	2.95	3.11	3.11
	B8 よくわからないことがあるとき、質問したり自分で調べたりしている。	3.02	3.13	3.09
課題対応能力	C1 学級・学年・学校などの問題点や課題を見つたり、考えたりすることができる。	2.97	2.83	2.57
	C2 課題解決のための対策や取り組み順序を考えていくことができる。	2.91	2.92	2.69
	C3 他の人のアドバイスを参考にしながら自分の課題解決策を実行していくことができる。	3.08	3.10	2.95
	C4 身の回りで問題が起きたときに解決しようとする。	3.11	3.20	3.08
	C5 失敗の原因を理解し、繰り返さないように意識して行動している。	3.15	3.19	3.08
	C6 生き方や進路(職業、上級学校)についての情報を集めている。	2.76	2.89	2.84
	C7 職業についての情報を調べたり、働く人の話を聞いたことがある。	3.31	3.04	2.93
	C8 調べた進路情報や研究内容をまとめ、工夫して発表したことがある。	2.92	2.23	2.27
キャリアプランニング能力	D1 今学んでいることや活動していることが将来につながることを理解している。	3.11	3.15	3.09
	D2 人の生き方や人生に考えさせられたり感動したことがある。	3.21	3.15	3.24
	D3 働いている人たちの考えや気持ちを理解している。	3.13	2.95	3.02
	D4 自分は将来何のために働くか説明できる。	2.94	2.81	2.96
	D5 将来の夢や就きたい職業や仕事がある。	3.14	3.24	3.13
	D6 自分の将来について考えたり、進むべき道考えたことがある。	3.33	3.33	3.34
	D7 自分のことは自分で決めるようにしている。	3.26	3.32	3.29
	D8 自分の個性や興味に基づいてよりよい選択をしようと思う。	3.52	3.52	3.46

イ) 考察

中1段階から生徒の資質を見極め、計画的にリーダー性を高めていくことが必要である。中2の「B1:自分の良さ(長所)や優れている面を述べることができる」や中3の「D4:自分は将来何のために働くか説明できる」は、これまでの教育活動に課題があったことを示唆している。これらの項目は、プログラム開発において重視されるべき項目だと考える。

また、表5の質問項目は、基礎的・汎用的能力の変容を分析するために、定量的な評価指標として、定期的に活用した。

③基礎的・汎用的能力の獲得感と学習意欲の関係
学習意欲を高めるために、基礎的・汎用的能力

のどの下位項目に焦点を当ててプログラムを開発していくのか、その指針を明確にするために、基礎的・汎用的能力と学習意欲の関係を分析した。分析には、平成27年度中3の11月全国学力推移調査、10月Q-U検査、11月キャリア意識調査を使用した。

ア) 分析

図14は学習に対する気持ちと平日の学習時間の関係を表したものである。頑張っていると認識している生徒ほど学習時間が長い。

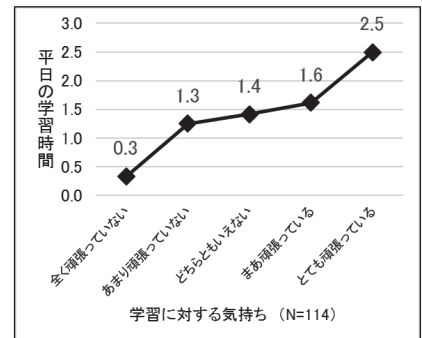


図14 学習に対する気持ちと平日の学習時間の関係

次に図15を見ると、学校の勉強に進んで取り組んでいる生徒ほど学習時間が長い。

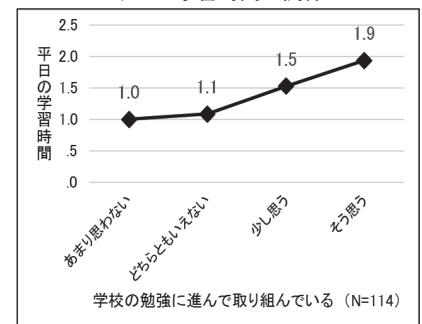


図15 学校の勉強への取り組みと平日の学習時間の関係

さらに、図16では、今学んでいることや活動していることが将来につながると理解している生徒ほど、学校の勉強に進んで取り組んでいる。

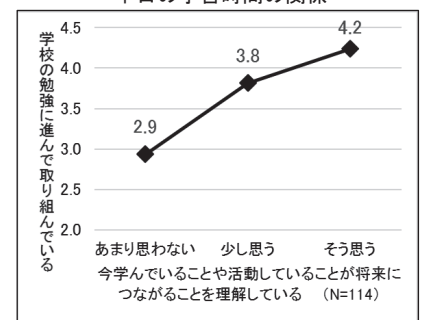


図16 学校の勉強への取り組みと平日の学習時間の関係

イ) 考察

これらの分析結果から、学習意欲を学習時間で関連付けて捉える根拠が得られた。学習意欲の質問項目とキャリア意識調査の下位項目に着目し、有意差が見られた項目は表6に示す通りである。学習意欲に影響を与える基礎的・汎用的能力の下位項目が明確になった。これらを重点項目とし、プログラムに反映させていくことで学習意欲の向上につながると考える。

表6 学習意欲に有意差が見られるその他の下位項目

- ・B4:目標を持ってそれに向かって努力することができる
- ・D1:今学んでいることや活動していることが将来につながることを理解している
- ・D6:自分の将来や進むべき道考えたことがある

(3) 全体構想の作成

表7 平成27年度に実施した委員会の協議内容

回	月日	主な内容
1	11.6	全体構想について
2	12.18	全体構想, 授業提案, 作業部会設置について
3	3.22	来年度の年間計画について

表7は平成27年度に実施した委員会の協議内容である。会議では、「生徒は自分がしたいことばかりを主張して、自分の適性を踏まえ、社会でどう自分を生かしていくのか、考えきれていない」や「社会に出たら好きなことだけでなく企業や社会のニーズに合わせて何もしないといけない」等の意見が出された。児美川(2013)は「キャリア教育のウソ」において、キャリア・アンカーを「職業生活における価値観」と表現している。会議では、この考え方に触れ、進路選択していくには、「やりたいこと(興味・関心)」「やれること(能力、適性)」「やるべきこと(社会のニーズ)」を広げたり、つなげることが必要であり、それらの共通部分をキャリア・アンカーと捉え、なりたい職業にこだわることもキャリア・アンカーを構築していくことが大切だという共通理解が得られた。

これらの議論を経て、社会とのつながりを意識させ、働くことや学ぶことの意義を考えさせていくことを重視し、全体構想作成に至った。図17は全体構想のキャリア教育全体目標を抜粋した図である。

キャリア教育全体目標			
自らの個性や能力を最大限発揮し、社会の文化の創造と発展に貢献できるように、「自分が自分の人生をよりよく生きる」という視点を確立し、進路意識の高揚を図り、適切な進路選択ができる。			
育成すべき能力や態度(基礎的・汎用的能力)			
学年目標	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力
Ⅰ期 (中1・中2)	多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを主張し、意見を述べることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たし、つづきと協力・協働して社会に貢献し、今後の社会を積極的に形成することができる	自分が「やれること」「やるべきこと」「やりたいこと」について、社会との相互関係を見つめ、今後の自分自身の可能性を考えた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思いや感情を伝え、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする	仕事を上での様々な課題を立ててその課題を整理し、解決することができる
Ⅱ期 (中3・高1)	適切なコミュニケーションを図り、リーダーとフォロアーが互いに認め合いながら、協調・協働して物事に取り組むことができる	「社会の中で自分が「やれること」「やるべきこと」「やりたいこと」を考え、職業的な能力・適性を理解し、それらを受け入れて伸ばそうとする	身の周りの課題を発見し、課題解決に向けての諸条件を理解し、必要な情報を集め、活用できる
Ⅲ期 (高2・高3)	コミュニケーションを図り、リーダーとフォロアーの立場を理解し、互いに能力を引き出し、チームで物事に取り組むことができる	困難な状況があっても、自らの思考や感情を律し、社会の中で自己を生かすための能力や態度を自ら高めようとする	自己実現に向けて、身の周りの課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を整理し、解決しようとする

図17 キャリア教育全体構想(一部抜粋)

さらに、部会では、職業観・勤労観を高める道徳の授業実践や会議を通して、キャリア意識調査で活用した評価指標を改善し、プログラムの試行版として年間計画を作成した。

(4) プログラムの試行と評価

① 学習活動

試行版の年間計画をもとに学習活動を実践した。中2では、9月の職場体験を学習活動の中心として、他の体験活動や道徳の授業を関連付け、効果

的にキャリアプランニング能力を高めることを目指した。特に、生徒が「働くことの意義」を考え、働くことの価値観を構築していく場面を多く設けた。前年度からの改善点として、職場体験の

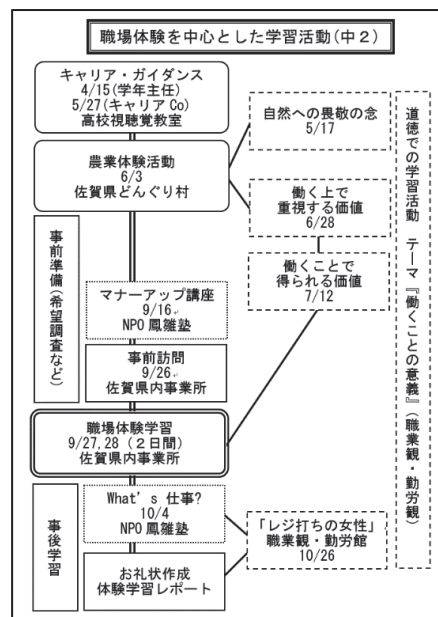


図18 学習活動の試行(中2)

実施時期を6月から9月に変更したこと、体験期間を1日から2日に増やしたことがあげられる。また、マナーアップ講座や職場体験後のワールドカフェ形式の振り返りをNPO法人「鳳雛塾」に依頼するなど、外部機関と連携を図った。

キャリアプランニング能力の下位項目である「自分は将来何のために働くか説明できる」「働くことの意義」と解釈し、時期と学年における二要因の分散分析を行った。その結果を表8に示す。

表8 「働くことの意義」の学年間の比較

学年による「働くことの意義」の自己評価の二要因分散分析の結果						
学年	自己評価 (M ± SD)		F値	時期	交互作用	
	4月	7月				
高1	2.98 ± 0.86	2.93 ± 0.86	1.12	0.3	6.79***	
中3	2.84 ± 0.87	2.84 ± 0.90				
中2	2.63 ± 0.96	2.97 ± 0.80				
中1	2.98 ± 1.05	2.78 ± 1.04				
高1:N=229 中3:N=116 中2:N=114 中1:N=120						***p<0.001

表8より、時期と学年間の主効果は認められなかったが、交互作用が認められた。図19で示されてるように、中2において4月から

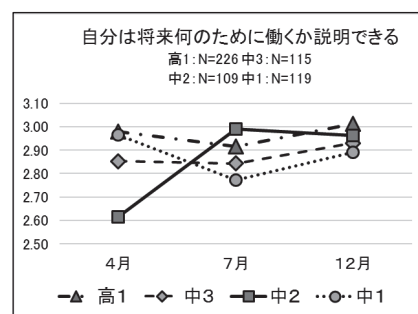


図19 働くことの意義の変容

7月にかけて有意に上昇した。7月から12月にかけてはこれ以上の上昇は見られなかったが、4月からの伸びを考慮すると、職場体験の事前学習として設定した道徳などの「働くことの意義」を考えさせる学習活動は一定の効果があった。

②ポート・フォリオ

中3の生徒個人資料を作成した。資料は、進路希望の変遷、学習成績の変化（定期考査、全国学力推移調査）、キャリア意識の変容等を、A3 用紙1枚にまとめた。生徒個人資料は、三者面談、高校進学時の引継ぐ資料として活用している。

表9 三者面談で活用した中3担任の感想

- ・1学期の成績、進路希望（GTZ）を確認することができ、過去のデータが一目で分かった。
- ・資料をあちらこちら見る手間が省けて、時間を話に費やすことができた。
- ・「進路希望」では、5月、7月、・・・とあり、時間の経過に従って希望の変化が分かった。
- ・「学科変更の可能性」を一目で見たので悩んでいる生徒の把握ができた。
- ・時間的に成績部分しか扱えなかったが、それ以外の情報は二者面談で活用できると思う。
- ・保護者は豊富なデータが1枚にまとめられていて「すごい」という反応が多く、概ね好評だった。

表9のように、生徒個人資料については中3担任の評価は概ね好評だった。特に、多くのデータを1枚の用紙にまとめられたことで、資料を見る時間が短縮されたことが評価された。

③カウンセリング

中3の進路意識が低い生徒を中心に、キャリアCoによるカウンセリングを10月から11月にかけて実施した。対象生徒を抽出して行うカウンセリングを「ピックアップ面談」と呼ぶこととする。対象生徒の選定については、まずキャリアCoが、5月のQ-U検査の学校生活満足度をもとに、生徒を「全体的に高いタイプ」、「教師との関係が低いタイプ」「進路意識が低いタイプ」の3つのタイプに分類した。

次に「進路意識が低いタイプ」と「教師との関係が低いタイプ」の中から、進路希望調査で学科変更の可能性があるという回答していた生徒、学科希望が度々変わっている生徒を30名程度抽出した。それらの生徒から担任が選び、最終的に17名の生徒に対してピックアップ面談を行った。カウンセリングの主な内容は、学科選択への悩みの相談、生徒が必要とする進路情報の提供である。多い生徒で3回実施したが、ほとんどの生徒は1回の実施となった。進路意識の低い生徒の特徴として、進路情報を得ていないことがあげられる。学科選択に悩んでいても、進路意識が高い生徒はなぜ選択を迷っているのかを理解していた。

一方、進路意識の低い生徒は、進路情報を自分で得る手段を知らないことが多く、判断するための情報を得ていなかった。これまでに情報収集のためのガイダンスは行われているが、このような生徒には効果が低い。今回のカウンセリングでは、キャリア・アンカーとなり得るものに生徒自身が気づいていけるような問いかけを行い、進路情報収集の仕方を確認した。また、カウンセリングに

は生徒個人資料を活用し、初めて話す生徒でも状況把握に役立った。

図20は、ピックアップ面談を実施した生徒と実施していない生徒の違いによるキャリアプランニング能力の変容である。実施した生徒は、7月から12月にかけて実施していない生徒よりも大きく上昇した。この結果から、キャリアCoによるピックアップ面談は一定の効果を得たといえる。

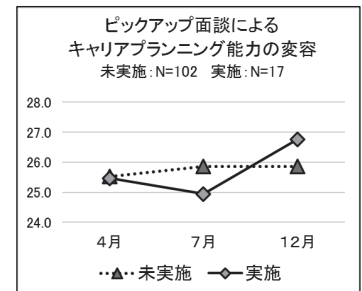


図20 ピックアップ面談によるキャリアプランニング能力の変容

7 全体考察

(1) 基礎的・汎用的能力の変容

図21より、高1と中1は、4月から7月にかけて下降し、7月から12月にかけて上昇している。高1の普通科は2学期以降に文理選択が迫られていることで進路意識が

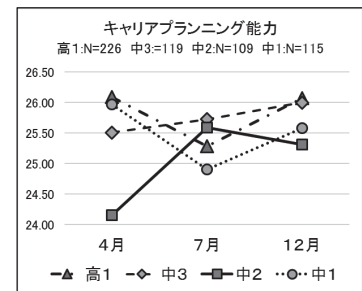


図21 キャリアプランニング能力の変容

高まり、中1は10月から進路学習に取り組んでおり、その効果があったと推察する。中3は、4月から12月にかけて少しずつ上昇している。高校進学へ向けた学科選択に伴う学習活動、三者面談やピックアップ面談などのカウンセリングを年間通じて実施していることが要因であると推察する。

中2は、4月から7月に高まり、7月から12月にかけては若干下がっている。前述の働くことの意義においても、同様の状況であった。7月から12月の下降した疑問を解決するために、前述の中3と同様に、生徒を3つのタイプに分類した。

タイプ別のキャリアプランニング能力の変容を表したグラフが図22である。教師との関係が低いタイプは7月から12月にかけて下降している。また、進路意識が低いタイプも同じ時期に若干下降しており、中2の7月か

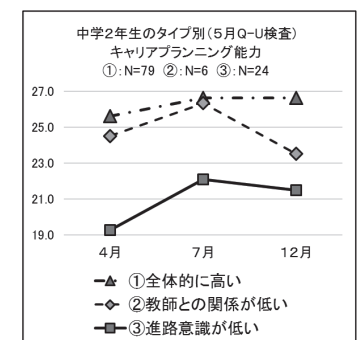


図22 タイプ別のキャリアプランニング能力の変容

ら12月のキャリアプランニング能力の下降は、この2つのタイプの影響であると考えられる。

図23はキャリアプランニング能力の下位項目である「生き方や進路についての情報を集めている」の

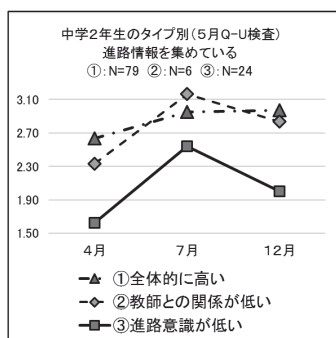


図23 進路情報収集の変容

タイプ別の変容を表したグラフである。職場体験を中心とした一連の学習活動は10月までで終わっており、教師との関係が低いタイプや進路意識が低いタイプは、進んで進路情報を収集するような主体的な行動やキャリア意識の持続性が低いと考えられる。このようなタイプは、学習活動だけでキャリアプランニング能力を高めていくことは難しく、中3で効果が得られたピックアップ面談など、カウンセリングでの個別の支援が必要となる。

図24より、中2の後半から中3の4月にかけてキャリアプランニング能力は低くなると推察する。キャリアプランニング能力は、学年や時期により変化し、生徒のタイプにより変化が異なる。職場体験を中心とした学習活動により、キャリアプランニング能力が高まるが、低くなる時期での学習活動の充実やカウンセリングの導入などを次年度以降のプログラムに反映させることとした。さらに、これらのことを教師が共有してキャリア教育に取り組むことが重要である。

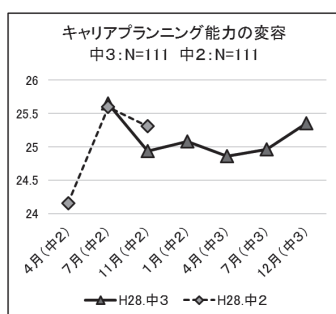


図24 キャリアプランニング能力の変容

また、本研究では、学習意欲の向上や学習時間の増加は見られなかった。学習意欲に影響を与える下位項目を重視し、キャリア教育の視点で教科学習を充実させることが必要であると考えられる。

(2) キャリア教育に対する教師の意識の変容

図25は、在籍校のキャリア教育に対する中学校教師の意識の変容である。キャリア教育の実践と育てる生

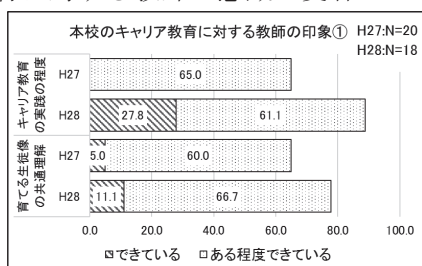


図25 キャリア教育に対する教師の印象①

徒像の共通理解は、共に昨年度よりも高まった。

さらに、図26より、プログラム開発へ向け

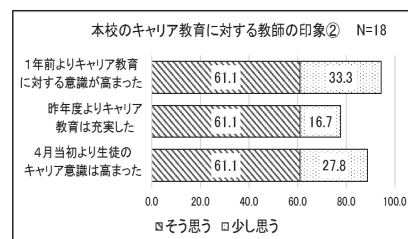


図26 キャリア教育に対する教師の印象②

た議論や実践を通して、中学校教師のキャリア教育への意識が高まったことがうかがえる。

また、表10にあるように、これまでの教育活動の位置づけが明確になったなど、キャリア教育の視点で教育活動を整理できたことが評価された。一方で、実践段階での教師の共有や協働の必要性が指摘され、プログラムを学校全体へ浸透させていくことが課題である。

表10 キャリア教育の取り組みに対する教師の主な感想

- ・色々な教育活動の位置づけがはっきりしてきたと思う。
- ・生徒や職員のキャリア意識が高まり、これまでの実践が整理、系統化されたり、新しい取り組みも行われるなど、キャリア教育の取り組みが前進していると感じる。
- ・準備は確実に進んでいると思う。実践の段階でどこまでできるかを詰めていけると良い。
- ・来年度以降の見通しが立った。新たに求められる教師にも本校のシステムや流れについても具体的に説明できるようになったと思う。
- ・今年度計画したことを定着させ、学校全体に浸透させていくことが大事。
- ・取り組む内容には問題がないと思うが、実践する教師が同じ方向を向いて協力しなければ、キャリア教育を深めていくことにはならない。

8 成果と課題

- キャリア教育を推進する組織を整備し、全体構想、評価指標、年間計画を作成した。
- 学習活動、カウンセリング、ポート・フォリオを適切に配置することで、キャリアプランニング能力を高めることが期待できることを示した。
- 中学校教師のキャリア教育への意識が高まった。
- プログラムを学校全体に浸透させていくこと。
- キャリア教育の視点に立った教科学習の充実。

主な引用・参考文献

- 中央教育審議会答申 2011 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について
- 児美川孝一郎 2013 キャリア教育のウソ

謝辞

本研究をまとめるにあたり、研修機会を与えて頂き、ご支援をいただいた佐賀県教育委員会に心から感謝申し上げます。また、在籍校をはじめとして関係の諸先生方に多大なるご協力をいただきました。ここに深く感謝申し上げます、謝辞とさせていただきます。